

3

課題を発見する



「道民森づくりネットワークの集い」ポスターセッション（2005年）

より、参加目的として「人との出会い」、「レク」、「学習」が多い結果は、森林の手入れ作業を通じて自分の生活を豊かにするような効用を得たいという参加者の意識を示していると思われ*²。ゆえにこの結果はそうした観点から理解することが必要です。

満足度を高める方法としては、一般化は難しいですが、まずは「でみられた組織の長所を大切にすること、参加を継続する条件として多かった人間関係をよくしたり、負担なく参加できる環境を整えて、「自分の参加経験を増やしたい」と望む会員をサポートすることなどが大切でしょう。ここでは「参加者を増やす」が比較的多くみられましたが、別途行った事務局への聞き取り調査では、森林の手入れ作業のみの活動では参加者の増加に限度があること、参加者を増やすために行うレクなどの活動と森林づくり作業のバランスの取り方などに課題を感じている団体も多数みられました。

参加者に聞く：活動の魅力とは？

楽しみながら作業 若い頃は登山に熱中していました。ミドル世代になって若い頃よりは体力がダウンしてきて、なにか別に山にかかわることをやりたいと思って森林ボランティアに参加するようになりました。普段はマンション暮らしの会社員ですが、週末に都市近郊の山林で間伐などの手入れ作業をし、木の香りを嗅ぐとリフレッシュできます。作業でさわやかな汗を流し、チェーンソーの操作を学び、植物が子孫を残す工夫の凄さなどを発見するなど、新しい体験を楽しみながら活動に参加しています。

環境改善に貢献 地球温暖化防止につながる二酸化炭素の吸収源としての森林の効用に注目しており、活動への参加は微力ながら環境改善に貢献している自負があります。一方で作業で山にはいると心地よく、森の空気にすがすがしさを感じます。作業後の爽快感も格別で、健康のためにも活動を続けています。

仲間との出会い 定年を迎えるまでは仕事人間で、30年も生活していながら地域の自然のことを何も知りませんでした。社会人向けのカレッジで団体を知り、活動に参加するようになりました。活動の魅力は仲間とのつきあいです。様々な特技や個性をもった人と触れ合うことができ、とても勉強になります。

人間関係・雰囲気よさ 会の雰囲気がとても前向きでリラックスできます。皆が会のために自発的に働く姿勢ができています。活動は、森林づくり作業だけではなくフィールドの地元と一緒に祭りをしたり、森林教室を開催したり、焼き物窯をつくって陶芸をしたりと様々です。企画があがると皆が「やろう、やろう」と盛り上がり役割分担をして作業を進めます。その結果として幅広い活動ができています。

代表者に聞く：会の継続のために心がけていることは？

「いばらき森林クラブ」代表

新企画・新会員を増やす 一般的に会員は入会して1年程は熱心に活動に参加してくれます。しかしある程度活動の様子をつかむと「もうわかった」と足が遠のくものです。活動に新鮮さを失わせないため、常に新しい課題に挑戦すること、新会員を増やし、会員の様々なアイデアを企画に反映させることを心がけています。細かなことですが、新会員がリラックスして参加できるよう、活動中にはなるべく声をかけるようにしています

達成感を高める 各回の活動の参加人数は15～20名がちょうどいいと思っています。10人以下だとやはりパワー不足です。活動するからにはパワーを感じたいものです。

一人が作業できる量はわずかですが、会の仲間を取り組めば結構な面積の作業ができ、それが達成感につながります。普通ならば森林所有者ではない都市住民が、山で木を伐ったりすることはできません。しかし仲間とともに活動することでそれができ、自分達も作業を楽しみながら社会からも評価されます。世の森林ボランティアを駆り立てる原動力はそのあたりにあるのではないかと思います。

「カッコウの里を語る会」事務局

会員の能力を活かす 会員の能力を活かしながら身の丈にあった目標で活動を行うことが大切です。会の長所は企画毎に会員が「これを引き受けるよ」と自発的に名乗り出る雰囲気ができていることです。ピラミッド構造の組織では、リーダー以外の会員は「指示待ち」で、リーダーが欠けたとたんに活動の勢いが失われてしまいます。また目標をあまり高く設定しすぎると、外部から専門家を呼ばなくては、など運営が大変になります。会では「地道に無理をせず、自分達の地域の森をつくっていく」というスタンスで、会員がその時々で指導者や担当者をつとめ、核になりあいます。そうした活動に満足をおくことも会の継続の理由かもしれません。

* 2 この意味で、森林ボランティアを労働力とする見方は、多数の参加者の意識とは合致するものではない。

参加者の満足度を高める活動とは2

森林ボランティアの参加者による活動評価では、総合満足度には「指導のわかりやすさ」や、「人との出会い」の達成度が特に影響していました。参加者の関心や能力を活かしながら、学習会や交流を深める活動を企画することが重要です。

参加者の満足度に影響する事項を明らかに

前ページに引き続き参加者の満足度を高める活動づくりのアイデアを得ることを目的に、石狩森づくりセンターが活動を支援、主催する森林ボランティア（5団体2講座、活動42回）の参加者609人にアンケート調査（図1、資料1）を行い、あわせて各活動日の参加人数や時間数について観察調査しました。活動内容は間伐、下刈りなどの人工林の整備で、当センターの支援から各組織のプログラムはほぼ均一です。アンケートのデータのうち、運営評価（6項目）についてはロジテックス回帰分析、参加目的達成度と森林ボランティア参加頻度、所属については数量化 類によって、それぞれ総合満足度に影響を与える事項を調べました。さらに 活動参加頻度別総合満足度を集計し、実際に総合満足度が参加に関係しているかを調べました。観察によるデータは の結果を具体化するために使用しました。

「指導のわかりやすさ」が総合満足度に影響

集計の結果、総合満足度では満足度5が50%、運営評価では27～46%を占めました（図2）。

について、総合満足度が3以上で運営評価の全てに回答した554を対象とした^{*1}ところ、総合満足度に最も影響を与えていたのは「指導のわかりやすさ」でした（84ページ補：表1）。活動では当センターの職員ら林業技術者による指導が常に行われていますが、この「指導のわかりやすさ」について、特に学習会^{*2}があった活動の評価が高く現れました（図3）。さらに最適な学習会のあり方を明らかにするために、時間数、参加者1人あたりの指導者数と「指導のわかりやすさ」の評価の関係を調べました。その結果、評価は時間数や指導者数とは相関はなく、活動現場では参加者1人あたりの指導者数が0.1～0.2（平均0.18）人で、60～120（平均121.3）分の学習会が多く実施されていました（図4）。

1. 回答者の属性
所属（団体名など）、当活動参加頻度、森林ボランティア参加頻度
2. 参加目的
内容、目的達成度（5段階評価）
3. 運営評価（5段階評価）
山林の雰囲気、自宅からのアクセス、作業内容のよさ、作業のボリューム、指導のわかりやすさ、日程の流れ
4. 活動の総合満足度（5段階評価）

図1 アンケート調査項目

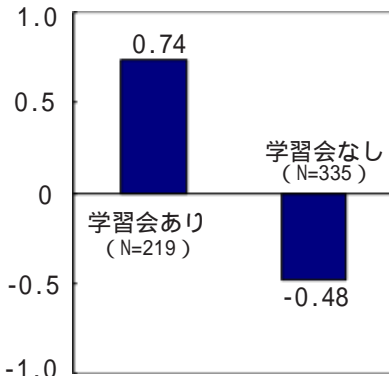


図3 「指導のわかりやすさ」評価

注1：数値は5段階評価のシグマ値
注2：t検定により「学習会あり」と「学習会なし」の平均値には差がある（ $P < 0.0001$ ）

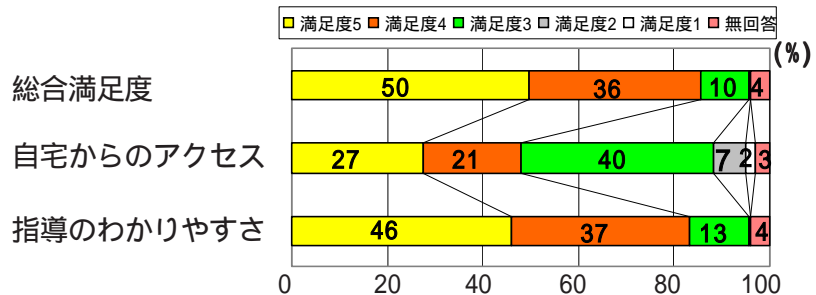


図2 参加者の活動評価結果（抜粋）：N=609

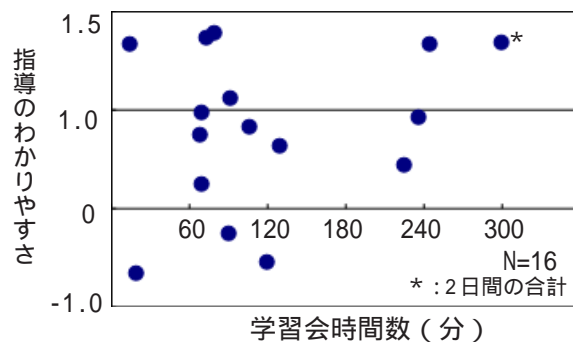


図4 学習会時間数と「指導のわかりやすさ」の関係

注1：縦軸は参加者の評価を活動各回で平均した数値
注2：学習会時間数には実技講習を含み、移動・休憩時間などは除く

* 1 で項目全てに回答した数は557。 の両分析では総合満足度2の回答3（609の0.5%）を除外した。

* 2 講師を設け特に技術や知識の習得を主眼としたプログラム。チェーンソーの取り扱い、測樹法や樹種学習など。

「人との出会い」の達成度が満足度に影響

参加目的の集計では、「学習」と「レク」の回答が多く（図5）、当日の活動によってこの目的が達成された度合いについては、前者では達成度4が、後者では達成度5が最多を占めました（図6）。

について、項目全てに回答した383を対象としました。総合満足度に最も影響を与えていた項目は「人との出会い」でした。「森林ボランティア参加頻度（他団体での活動も含む）」は、その人の森林ボランティア経験が満足度にどの程度影響するかを検討する項目でしたが、項目中影響力は最下位でした。「総合満足度5」の回答者の特徴は、「人との出会い」、「体力づくり」、「労力提供」などが「達成度5」であること、その人が「A」、「B」という特定の団体に所属することでした（84ページ補：図1）。

そこで「人との出会い」の影響を具体的に検討するため、総合満足度と各回の参加人数、休憩や昼食などの交流時間数、レクの有無との関係をみましたが、いずれも相関はありませんでした。

について、所属する組織・講座の年間活動数から回答者を3つのグループに分けました。参加頻度別の総合満足度は、年間活動数が「4～5回」と「1回」の2グループでは差がみられませんでした。が、「20回程度」のグループでは、「ほぼ毎回参加」の満足度は、「2回に1回位参加」、「初めて参加」よりも高く（図7）、リピーターを確保するために参加者の満足度を高める重要性を確認できました。

学習会、交流を深める企画を検討

この調査では、主に発足後4年未満の団体の活動や森林ボランティア養成講座を対象としました。より、参加者が「指導のわかりやすさ」を主な観点として活動の満足度を判断しており、かつ評価が非常に高いことは、今回対象とした活動の特色と考えられます*3。団体への当センターの支援は「活動が軌道に乗るまでの期間」とされ、今後は学習の成果を活かして各団体が自組織の中に指導者を育成していくことが大切です。

参加者の満足度を高める方法として、の結果より学習会の企画の他、でみられた様々な参加目的を満たす活動を工夫することが大切です。総合満足度への影響が高い「人との出会い」を満たす方法は、例えば参加者相互の親睦を深めるほか、新メンバーを積極的に増やしたり、森林所有者やフィールドの地元の人々、他団体との交流など様々です。あるいは、昼食時間などを利用して参加者の顔と名前をきちんと一致させるといった簡単な方法でも達成度は高まるかもしれません。で総合満足度5の評価には所属が影響していたことから、まずは自分達の活動の理念や持ち味を大切にすること、そして企画を提案しやすい雰囲気や機会をつくり、参加者の関心や能力を企画に反映させることが有効と思われます。

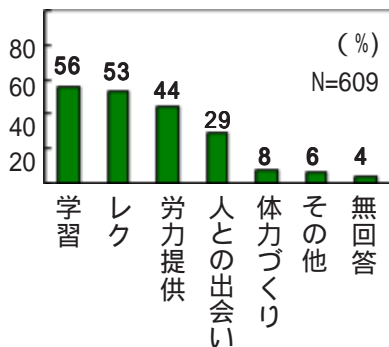


図5 参加者の参加目的 (複数回答2)

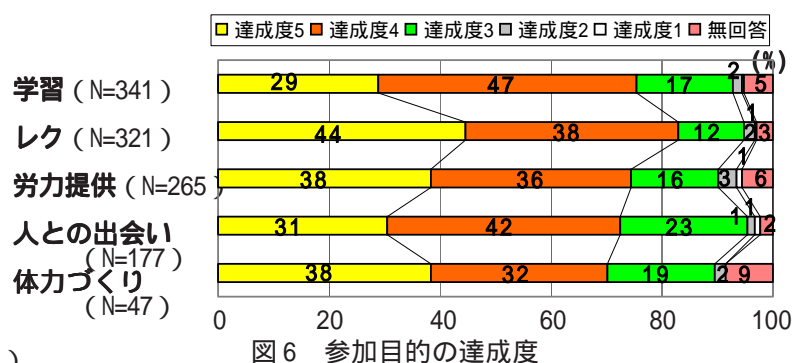


図6 参加目的の達成度

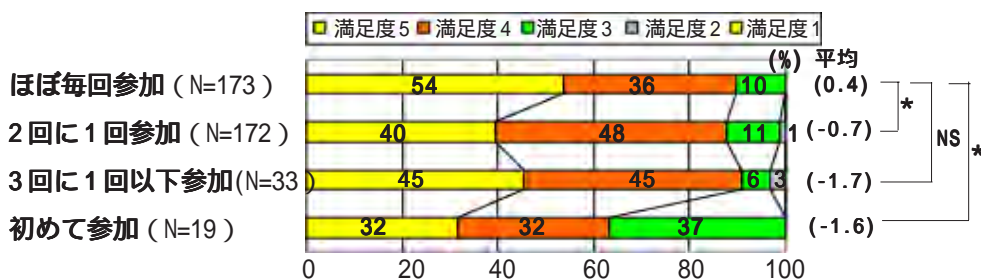


図7 参加頻度別総合満足度 (年20回程度開催)

注1: 全ての区分で満足度1の該当は0である

注2: 平均は5段階評価をシグマ値化した数値で大きいほど満足度が高い

注3: U検定より「ほぼ毎回」と「2回に1回」、「ほぼ毎回」と「初めて」の満足度の分布は差がある (p<0.05)

*3 東京都の森林づくり活動参加者対象のアンケート結果を用いて、類似する6項目で同様の解析を行ったところ、「総合評価」には「作業内容」の影響が最も高かった。

活動運営を評価する指標とは

森林ボランティアの運営スタッフによる活動評価では、「指導」、「交流」、「利便性」、「対話性」の4つが活動のできばえを測る上で重要な指標となっていました。特に「作業手順習得（指導）」、「リラックス（交流）」、「安全作業の周知（対話性）」などが運営の主要課題といえます。

スタッフの活動評価からチェックリストをつくる

森林ボランティアのスタッフはどのような観点で活動を運営しているのでしょうか。スタッフの視点を把握して活動のできばえを具体的に読み解けば、それを活動の改善に活かすことができます。そこで、評価事例を反映した簡便な活動チェックリストをつくることを目的に、森林ボランティアのスタッフにその日の活動を評価してもらうアンケート調査を行いました。質問項目は、森林ボランティアのマニュアル本や活動評価に関する過去のアンケート調査結果*1などから得られた25問（資料2）とし、因子分析を行って少数の尺度（因子）に集約させました。一方で因子の性質を知るために、先の25問についてスタッフに重要度をたずねるアンケート調査（資料3）を行いました。

項目は「指導」、「交流」など4つに集約

について、石狩支庁管内7団体全41回の活動を対象とし、延べ142人の回答が得られました。因子分析の結果、4つの因子が抽出されました（84ページ補：表2）。第1因子は「24 作業手順習得」、「23 指導提示工夫」などの負荷量が高く「指導」に関する因子としました。同様に第2因子は、「15 リラックス」、「16 会話が弾む」などが高く「交流」に関する因子とし、第3因子は、「1 アクセス軽負担」、「2 集合わかりやすさ」などが高く「利便性」に関する因子とし、第4因子は、「10 日程予定遂行」、「9 安全作業周知」、「21 作業成果実感」などが高く「対話性（対話により参加者を促し計画を実現する）」に関する因子としました。

■5よくあてはまる ■4少しあてはまる ■3どちらともいえない □2少しあてはまらない □1全くあてはまらない

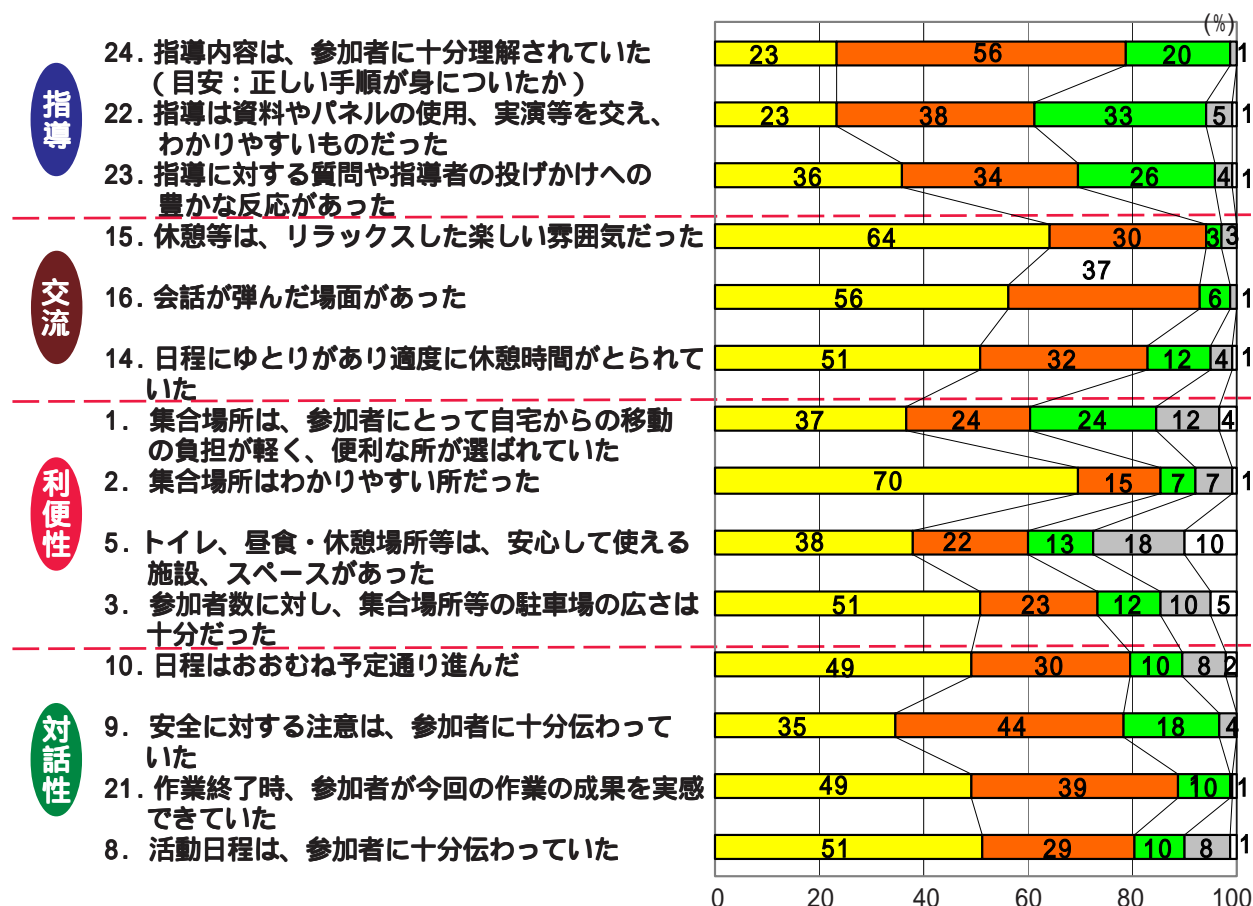


図1 森林づくり活動スタッフの活動評価結果（N=142，活動41回）

注：因子分析による解析。上部の因子ほど重要度が高く、また因子に属する質問項目は、上部の項目ほど各因子へのウェイトが高い。

これらの因子は第1～第4因子の順に活動の出来映えを測る上で重要な指標と考えられます。この尺度と大きく関わる14項目の回答結果を図1に示しました。この14項目はチェックリストとして使用できます。実際に41回（各回のデータはスタッフの回答を平均）の活動を評価したところ、「交流と利便性分野が高く、指導と対話性分野がやや低い（高低は相対評価）」事例が約7割を占めました。

対話性分野「安全作業の周知」などが主要課題

について、の主要な対象者である6人の回答が得られました。得られた4因子の重要度*2（活動運営上実現させる価値がどれくらいあるか）と実現度*3（当日どれほど実現できたか）を示したのが図2です。まず「利便性」は重要度と実現度の双方の値が4因子の中で最も低い分野となっています。これを具体的に理解するため、対応する質問項目（図3）をみると「1アクセス軽負担」、「5トイレ・休憩アメニティ」、「3駐車勝手よさ」の実現度が低いことがわかります。「1」は利用できる林地の立地に関わるためフィールドの設定時点からの配慮が必要ですが、例えば「5」は参加者とともに環境整備作業の一つとして取り組む*4、「3」は参加者間で駐車場所を分散させるなどの工夫によって、大きな負担を伴うことなく実現度を上げていくことができるかもしれません。

一方、図2において「対話性」は4因子の中で重要度が最も高いものの実現度が下位から2番目と低くなっています。同様に対応する質問項目（図3）をみると「9安全作業周知」、「8日程周知」が重要度が高いものの実現度が中程度に留まっています。これらは、同じ特性を持つ項目「24作業手順習得（指導）」、「15リラックス（交流）」とともに、活動運営上の主要課題として取り組むことが大切でしょう。

巻末に今回の調査で得られたチェックリストを掲載しました（資料4）。これを系口に「活動運営にはこういった留意点があるか」について議論を深め、自分達の組織にあった手法で活動を振り返り、よりよい活動づくりを目指していきましょう。

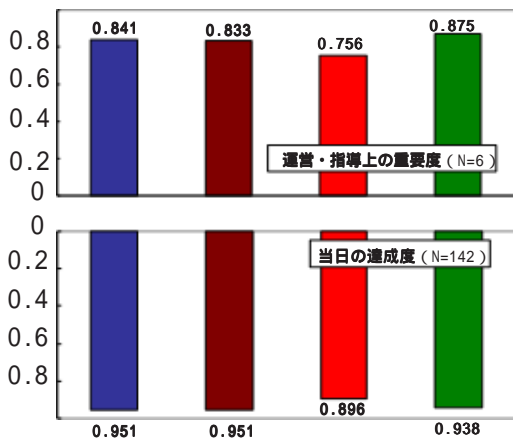


図2 4因子の重要度と実現度

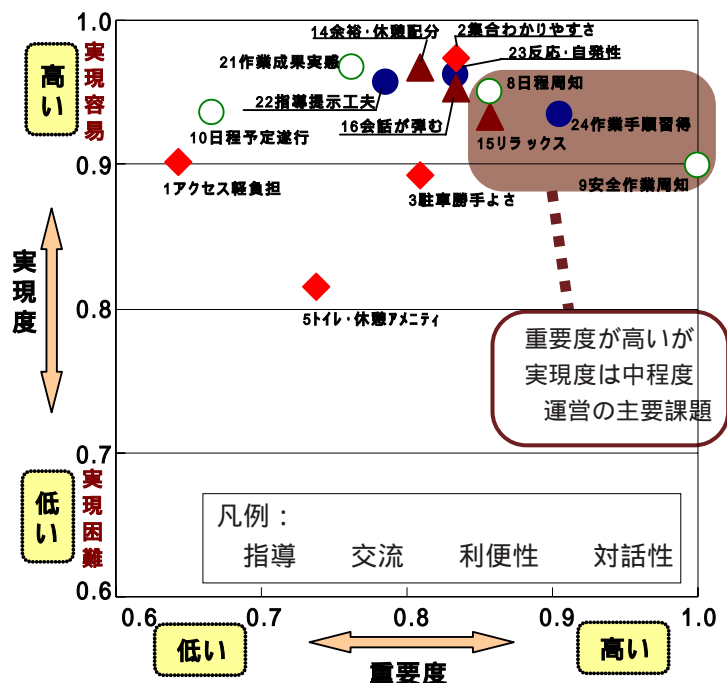


図3 14項目の重要度と実現度

*1（羽鳥，2001；真柴，2002，2003；木俣，2003；中川，2004）

*2 7段階評価の結果を平均し、満点を1.0として調整した数値。

*3 5段階評価の結果をシグマ値に換算して平均し、満点を1.0として調整した数値。

*4 「休憩場所とトイレを確保」（真柴，2002）

指導者に求められる技術とは

森林づくり行事の指導スタッフによる活動評価では、「作業目的を理解させる」などが総合的な指導のできばえを決める上で重要な技術とされていました。また指導力量や発揮される能力は、特にスタッフの所属や年齢に影響を受けており、活動の企画ではスタッフの多様な能力を活かす体制づくりが重要です。

スタッフの評価から指導技術の課題を明らかに

初心者の参加も含む森林ボランティア活動を盛りたてていくには、指導者の役割が重要です。指導者の技術に関する課題を明らかにして活動の質を向上させるアイデアを得ることを目的に、札幌南高等学校林整備行事*1(2回)のスタッフ117人に対して、個人の属性と、指導のできばえを問う10項目に5段階で回答してもらったアンケート調査(資料5)を行いました。まず指導技術の相互関係を把握するため、主成分分析を行って、10項目を少数の能力尺度にまとめ、個々の項目がその能力に果たす重要さの度合いを調べました。次に指導力量と回答者の属性の関係を調べるため、数量化 類によって、年齢、所属・身分、当行事指導回数、森林ボランティア活動参加頻度(以下活動頻度)のうち、得られた能力尺度に特に影響を与える属性を明らかにした上で、属性別の主成分得点平均値を算出しました。

「作業目的を理解させる」などの重要度が高い

有効回答数は114で、10項目については、中程度より高い評価(「5よくあてはまる」「4ややあてはまる」合計)が、項目毎66~88%を占めました(図1)。

では、10項目は2つの主成分に集約され、第1主成分は「総合指導力」、第2主成分は「ファシリテイト(意欲を引き出す)/技術伝達能力」と解釈できました。図2より、上部に位置する「10作業目的を理解させる」「2手順・役割を周知させる」「9作業手順を習得させる」などは、他の項目よりも総合指導力を決めるのに重要な役割を果たしていること、左側に位置しファシリテイト能力のウェイトが高い「4協力作業」「8成果を実感させる」などは、これらに次いで役割が重要なこと、そして右側下部に位置する「7疑問を解消する」「6模範的実演ができる」は技術伝達能力のウェイトが高いものの、総合指導力を決める上では比較的重視されていなかったことがわかりました(図2)。

- 3. 生徒から質問が出たり、スタッフ(あなた)の投げかけに豊かな反応が見られた
- 8. 作業終了時、生徒たちが今回の作業の成果を実感できていた



図1 活動評価結果(抜粋):N=114

注:()内数値は「5よくあてはまる」「4少しあてはまる」の合計値

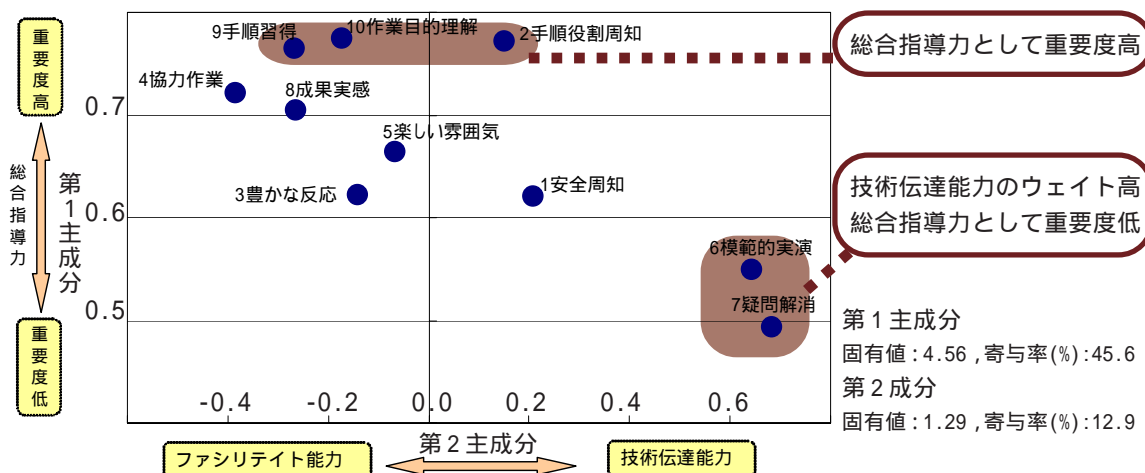


図1 評価項目の固有ベクトル

能力尺度にはスタッフの「所属・身分」「年齢」が影響

では、全問に回答しグループを受け持ち直接生徒を指導した93名を分析の対象としました²。数量化 類の結果、総合指導力には「所属・身分」が、ファシリテイト/技術伝達能力には「年齢」、「所属・身分」が特に大きな影響を与えていました。双方に影響が高かった「所属・身分」別の主成分得点平均値をみると、総合指導力について教員が最高で公務員が最下位であること、教員と公務員はファシリテイト能力が高く、林業技術者は技術伝達能力が高いこと、市民ボランティアはいずれの能力においても中間的な位置にあることがわかりました(図3)。

また森林ボランティア経験の効果をみるため活動頻度と総合指導力の関係を「所属・身分」別に調べたところ、他の3者がおおむね「活動頻度が高いほど総合指導力も高い」傾向が見られたのに対し、市民ボランティアでは逆に「活動頻度が高いほど総合指導力が低い」傾向が見られました(図4)。

スタッフの多様な能力を活かした活動づくりを

の結果より、指導の総合的なできばえに強く関わると意識される「10作業目的を理解させる」などは、指導の優先課題と扱うことが大切だといえそうです。一方、比較的重視されていなかった「7疑問を解消する」は、教授分野での主要課題とされる技術ながら、中程度より高い評価が「3豊かな反応」と並び最低で、他と比べ高度な技術と認識されていると思われます。これら技術相互の関係に配慮し、指導者同士のフォローやノウハウの共有によって、段階的な指導技術の向上が期待されます。

また、総合指導力とファシリテイト/技術伝達能力には、「所属・身分」や「年齢」が他の属性よりも大きく影響していた の結果から、指導力量や指導場面で発揮される能力は個人の経歴や社会経験によって異なることがわかります。これを加味し、活動の企画においては、異なる経験を持つスタッフの多様な能力を活かす体制(配置・役割分担)をつくるのが大切です。

また、年1回の当行事の他に活動経験を殆ど持たない教員の総合指導力が最高位であったり、市民において活動頻度が高いほど総合指導力が低い、つまりシビヤな評価がなされる傾向が見られたことは、個人によって目標の水準がまちまちであることを示していると思われます。例えば生徒に作業目的を理解させたり、作業手順を習得させるといった場面で、「今回の指導でどの程度の達成を目指すか」についてスタッフで事前に共有しあうことが、よりよい活動づくりにつながると考えられます。

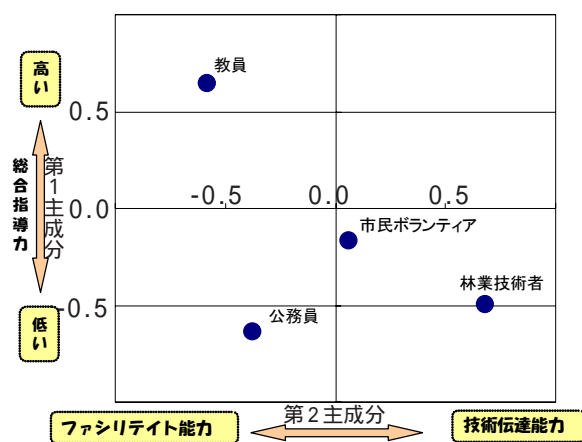


図3 所属・身分別主成分得点平均値

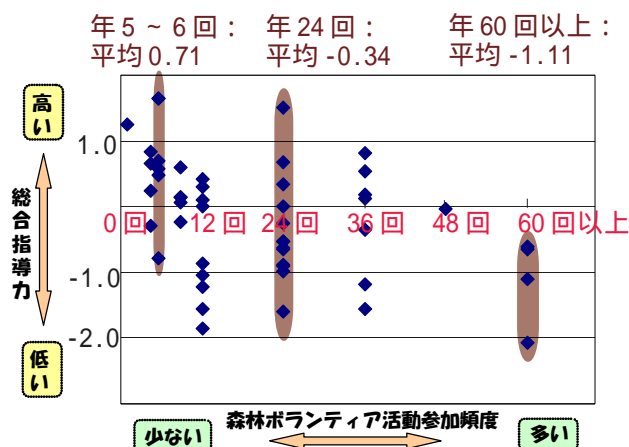


図4 市民ボランティアの総合指導力分布：N=50

注1) 林業技術者は森林組合と森づくりセンター職員、「公務員」はそれ以外の林務行政職員を示す。
注2) 図の左側からN=19, N=14, N=50, N=10である。

注：横軸は年間参加回数を間隔に変換して数直線に示してある。

* 1 18 ページ参照。

* 2 グループを担当せず巡回先のグループを評価した指導者は、グループ担当者より評価が高い傾向があり除外した。

森林所有者との連携を進めるには

森林所有者へのアンケート調査では、技術や責任能力など条件に応じて森林ボランティアを所有森林に受け入れてもよいという回答が5割強みられました。所有者と森林ボランティアの連携を進めるには、所有者への情報提供、ボランティアの技術や責任能力の向上、共同作業や交流会を糸口とした関係づくりなどが重要です。

森林ボランティアに対する森林所有者の意識を明らかに

森林ボランティアの実践には、活動場所の確保など、参加する市民と森林所有者との連携が不可欠です。所有者には自分の森林の整備を進める一方で、こうした市民活動への協力も期待されています。そこで、石狩、網走地方の森林所有者（個人2,698名）を対象に、郵送法によるアンケート調査を行い（図1、資料6）森林ボランティア（以下ボランティア）に対する期待や協力意向、数量化 類を用いて所有山林へのボランティア受け入れの意志に影響を及ぼす要因を明らかにし、ボランティアと所有者の連携をすすめるための課題について検討しました。

ボランティアを受け入れるには「信頼できる技術」を条件

506名から回答が得られ、有効回答数は483でした（回収率19%；発送未到達を除くと26%）。

1）について、まず最近5年間の森林手入れ状況は、「除伐・蔓切等をした」、「必要だが手入れなし」がほぼ同値で最多3割を占めました（図2）。次に、ボランティア*1への期待をたずねたところ、「やや期待している」が最も多く24%、ついで「期待している」が21%を占めました（図3）。さらにこの「期待あり」とした219人に、ボランティアに期待する役割についてたずねたところ、「森林・林業の大切さを伝える情報発信者として」が最も多く47%、ついで「森林・林業の理解者として」が26%を占めました。

また、ボランティアが所有森林を利用したいと希望した場合の対応については、最多は「条件に応じて受け入れる」で55%でした。これに「無条件で受け入れる」を加えた「受け入れ意志あり」は6割を占め、図2の「必要だが手入れをしていない」の3割を上回りました（図4）。

1. 所有森林手入れ状況
2. 森林ボランティアへの期待・内容
3. 所有森林への受け入れ
- 4.3 に関連する不安・条件
- 5.3 以外の協力内容
6. 個人の属性（3への影響解明に使用）
森林所在地、在村・不在村別、年齢、所有森林面積、人工林率、森林所有目的、最近5年間の施業有無、手入れ不足認識、自家労働力問題有無、今後の林業経営規模、地域森林管理支持、市民協議参加意志、ボランティア既知有無(13項目40カゴリ)

図1 アンケート調査項目

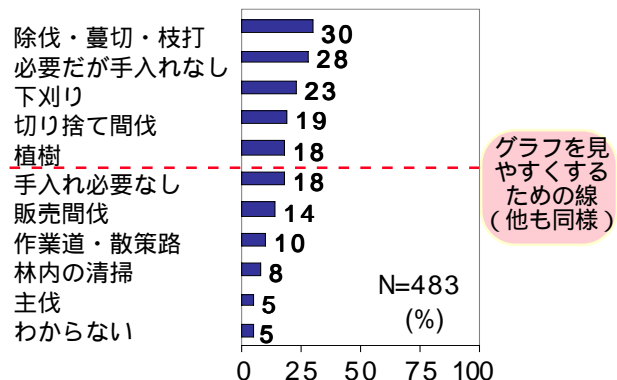


図2 所有森林手入れ状況 [複数回答可]

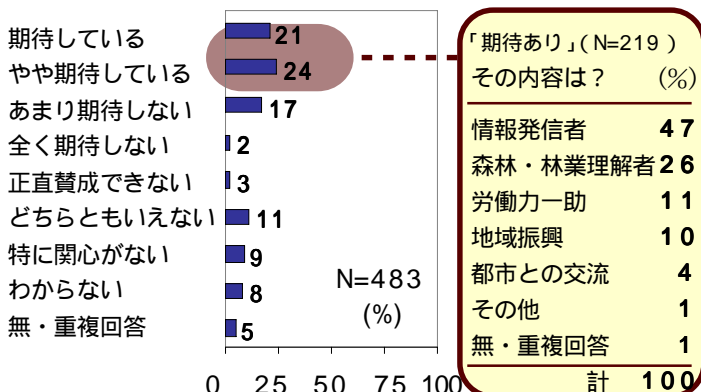


図3 森林ボランティアへの期待と内容

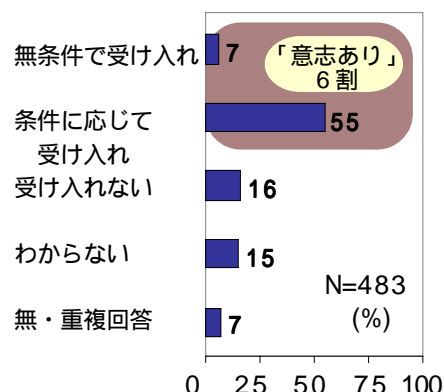


図4 所有森林へのボランティア受け入れ

*1 アンケートでは、森林ボランティアについて、無償で森林の手入れを行う市民グループであること、アマチュアであるが専門家の指導などを受けて技術を高め、地域の森林整備に役割を果たしている団体もあることを説明。

一方で、受け入れに「わからない」、ボランティアへの不信から「受け入れない」とした87人に、ボランティアへの不安についてたずねたところ、最多は「ボランティア情報不足」で43%、次いで「わからない」が多く39%でした(図5)。作業能力に関する不安は1割前後に留まり、ボランティアについての情報や判断材料不足を主要な不安とする回答が多いことがわかりました。

次に「条件に応じて受け入れる」とした273人にその条件についてたずねたところ、最多は「技術が信頼できること」で67%、次いで「火事や怪我が起きた時の責任能力」多く58%でした(図6)。

森林への受け入れ以外にできる協力としては、まず「特に協力したくない」は1割に留まりました。しかし最多は「わからない」で32%をしめ、次いで「一緒に作業に参加する」、「イベントに参加する」が各3割弱を占めました(図7)。

について、図1の3と6全てに回答した362人を、ボランティア受け入れに「意志あり」、「意志なし」、「わからない」の3グループに分けて分析した結果、受け入れ意志の有無には「市民協議参加意志^{*2}」の影響が最高でした。「意志あり」のグループの特徴は、「市民協議参加意志あり」、「既にボランティアに協力」といった地域森林管理(図8)へ積極姿勢、「過去5年間の施業が不明」といった経営意欲の低さ、「網走」、「林業目的で森林所有」といった林業との関連の強い回答などでした(84ページ補:図2)。

所有者への情報提供、ボランティアの技術向上などが課題

ボランティアと所有者の連携を進めるためには、所有者の不安として第一にボランティアについての情報不足があげられたことから、所有者への適切な情報提供が重要です。具体的には、ボランティア受け入れ意志の形成に特に地域森林管理への意向が影響していたことから、この考え方を下敷きに市民が森林整備に取り組む理由や背景を所有者に説明し、ボランティア活動の実例を伝えることが有効です。

またボランティア側には、受け入れ条件として多かった技術や責任能力の向上とともに、活動の成果を発信する努力も望まれます。一方、所有者側もボランティアを「情報発信者として期待する」ならば、自らの森林への思いや経営の実情についてボランティアに情報を伝達していく必要があるでしょう。両者の接点としては、受け入れ以外の協力として多かった、共同作業や交流会を糸口に信頼を徐々に形成し、協力関係へ結びつける道筋が重要と考えられます。

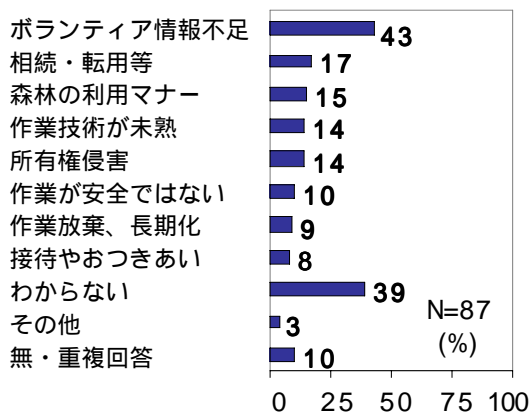


図5 ボランティア受け入れに対する不安 [複数回答 3]

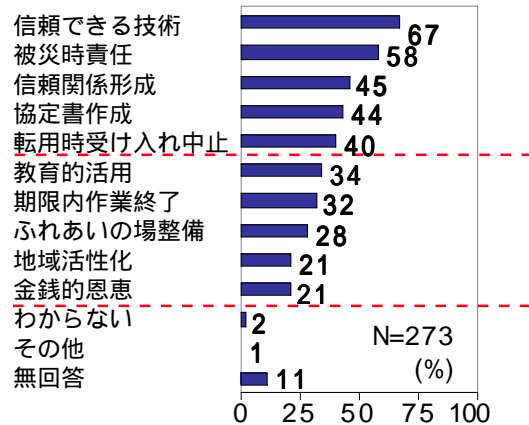


図6 ボランティア受け入れの条件 [複数回答可]

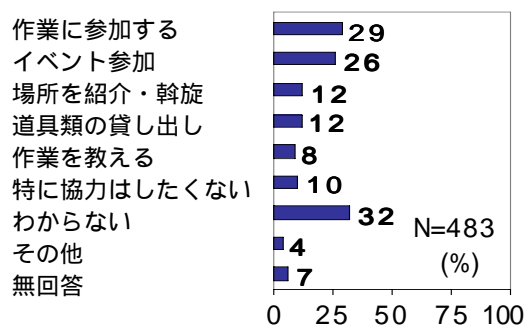


図7 受け入れ以外にできる協力 [複数回答可]

「地域みんなで森林を支えよう」：地域森林管理

森林は、飲み水などの水源をかん養したり、美しい景色をつくったり、地球温暖化を防止したりといった、さまざまな働きを持っており、多くの人がその恵みを受けています。

このため、近年、森林を所有者のものとするだけでなく、「社会の共有財産」としてとらえ、地域みんなで森林を守ったり、整備したりする「地域森林管理」という考え方が出てきています。

図8 地域森林管理の解説(アンケート本文より)

*2 アンケートでは、市民協議を「地域森林管理(図8)の計画づくりや意見をのべる場」と説明し、そうした場に森林所有者の立場で参加したいかをたずねた。

補足 多変量解析結果

補：表1 ロジスティクス回帰分析結果

	指導のやりやすさ	作業内容のよさ	日程の流れ	作業のボリューム	山林の雰囲気	自分のアタマ
標準化回帰係数	0.42***	0.24***	0.13***	0.12***	-	-

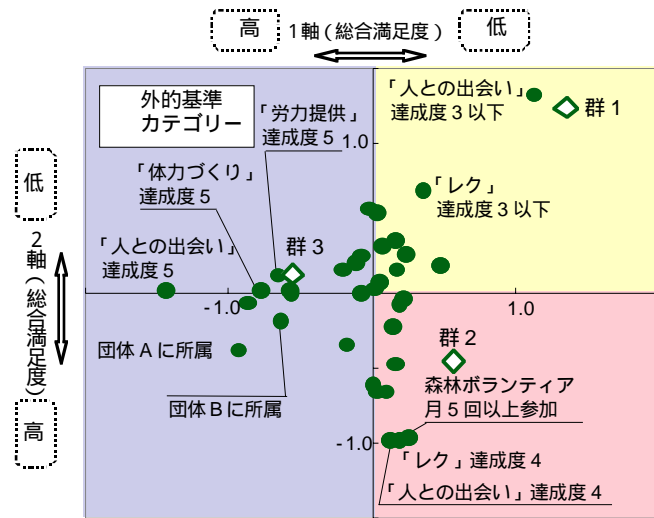
R²=0.46

注) 標準化係数をソフト変換して重回帰分析にステップカイズ法で変換した。 ***: 0.1%

補：表2 因子負荷量と因子寄与率

項目	第1因子 第2因子 第3因子 第4因子 第5因子				
	指導	交流	利便性	対話性	森林の楽しさ
24時間学習	0.928	-0.008	0.039	0.024	0.031
22指示工夫	0.750	0.063	0.058	0.155	-0.052
23安心・自覚性	0.616	-0.001	-0.016	-0.117	0.071
19リラックス	-0.001	0.951	0.002	0.019	0.106
16会話中心	0.038	0.787	0.002	-0.032	0.098
14余裕・休憩	0.008	0.675	-0.009	0.093	0.037
17作業負担	0.059	-0.021	0.828	0.047	-0.011
20安心やすさ	0.022	0.020	0.537	-0.049	0.052
5 休憩の大切	0.069	0.028	0.501	0.111	-0.078
3 研修の良	0.028	0.044	0.483	0.080	-0.008
11 研修の進	-0.023	0.071	0.004	0.699	0.036
9 安全の守	0.378	0.007	0.060	0.586	0.063
21 成果実感	0.011	-0.067	0.113	0.571	0.141
8 研修の和	0.057	0.085	0.059	0.512	-0.052
12 季節感	0.017	0.146	-0.022	0.063	0.772
11 楽しさ	0.025	0.150	0.003	0.026	0.760
寄与率(%)	15.17	12.87	9.19	7.82	6.41

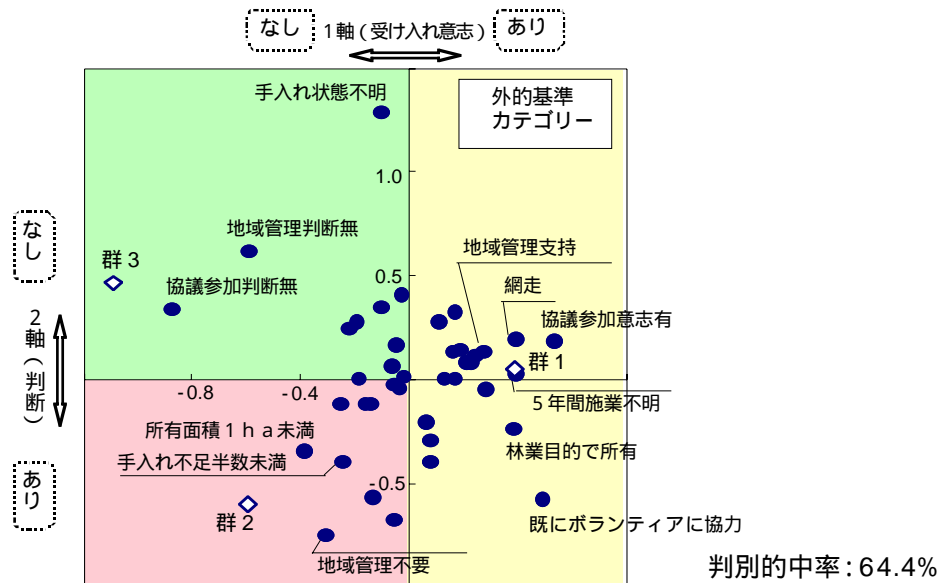
注) 25項目について因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行い、因子負荷が0.40以上の16項目を選出した。第5因子は項目数が2項目と少なかったことから本調査では尺度として使用していない。



判別の中率: 71.8%

補：図1 総合満足度に影響を与えるカテゴリー

注1) 数量化 類による分析。群1:総合満足度3 [黄](N=30), 群2:同4 [赤](N=141), 群3:同5 [青](N=212)。[]は関連する象限を示す。
注2) 各象限外縁部のカテゴリーほど外的基準への影響力が強く、該当するものみにラベルを記載した。



判別の中率: 64.4%

補：図2 ボランティア受け入れ意向に影響を与えるカテゴリー

注1) 数量化 類による分析。群1:受け入れ意志あり [黄](N=246), 群2:同意志なし [赤](N=63), 群3:わからない [緑](N=53)。[]は関連する象限を示す。
注2) 各象限外縁部のカテゴリーほど外的基準への影響力が強く、該当するものみにラベルを記載した。